

2021年度GTセミナー 第55回保育環境セミナー 物的環境編 前編②

第230号 2021年7月26日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カギヤ 奥山卓矢

物的環境編 前編②

2021年7月17日に「第55回保育環境セミナー」
(物的環境編 前編)を新宿せいが子ども園にて開催しました。

全国から110施設を超えるお申し込みを頂きました。
前回までは「空間的環境」についてお送りしていましたが、
今回は第2編目「物的環境」についての前編です。

「物的環境」について藤森代表から考え方をお示し頂きました。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)



第55回保育環境セミナー 基調講演（物的環境編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

【前回までのあらすじ】

「もの」の考え方や、「もの」の意味合いについての考え方をお話頂きました。今回は、各年齢の保育室におけるポイントなどを新宿せいが子ども園の保育室を通して、藤森代表に考え方を示して頂いています。

—はじめに—

皆さんおはようございます。前回は「空間」についての話をしましたが、前提は、私たちは「環境を通して保育をする」。それを見直そうということです。例えば、子どもたちにどんな力をつけた方がいいかよく言われるのが、非認知能力。それをどうつけるか。具体的な物があまり出てこないで、今回は具体的な話をしようと思います。私の園の例ですので、必ずしもいいとは限りません。保育環境研究所ギビングツリーがあって、一つの保育を考えて、一つは藤森メソッドでその一例が新宿せいがです。実践例ですので、自分の園の環境の中で、文化や人数、風土の中で行うものなので変えてもいいと思います。具体的な物がないとヒントがないので、具体例を話しますので自分の園なら、どんなものがあるのか話してみてください。そのヒントとして聞いてもらえたらと思います。

—0歳児クラスのもの—

認識する体験の必要性（色・形・手触り・数など）保育者は「子どもが自ら働きかけるように意図する」というよりも、「子どもが興味・関心を持つような環境を用意する」だけでいいのです。

—おもちゃの意味—

子どもたちの想像力を養いながら学び、使い、管理、創造、発明するための大切な手段であり、成長の手助けをする必要不可欠な道具

—ポイント1 五感を刺激するおもちゃ—

手触りを感じる（触覚） 音を鳴らして遊ぶ（聴覚） 臭いをかぐ（臭覚） いろいろなものを見つめる（視覚）
なめ回す（味覚）

—ポイント2 発達を促すもの—

「動くものを目で追うようになる」という発達過程
→目で追うことができるくらいゆっくり動くもの、例えば、風でゆっくり動くモビール
赤ちゃんの頃は、白黒とか、赤い色のようにハイコントラストな色を好むといわれているので、白黒で構成されたモビールを用意。色のグラデーションで構成されたようなもの

「音のする方に顔を向ける」という発達過程

→保育者が、ガラガラを鳴らし、そのガラガラをゆっくり動かして、赤ちゃんに目で追わせるようにするというような遊具が必要

—なめ回し—

赤ちゃんは、モノに触ろうとしますが、同時にそのものを確認するためには、手だけでなく、口を使って確かめようとします。物をすぐに口にもっていきこうとします。そのために、素材、着色料、大きさなどを考慮する必要があります。本来、なめ回し時期は大切な発達においてとても重要な行為なので、口に入れたときのリスクをなるべく排除してあげる必要があるでしょう。

—飲み込まないために—

大きさ：チャイルドマウス（乳児の口の大きさは直径3.2cm、3歳児は直径3.9cm）は、目安としてくるくるチャイムのボールの大きさ（チェックカーをトイレットペーパーの芯で作るといい）

味：苦い味をつける

穴：喉をふさがないように通気口のあるもの

—描画（肩、腕、手首の動き）—

手首が動けば点が描けます。そして、次に横線、縦線が引けるようになります。次に、ひじが動くようになると、半円の往復線ができるようになり、肩が動くようになると、ぐるぐるが描けるようになります。

→おもいっきり殴り描きをさせてあげるための握りやすいクレヨン、あまり筆圧の必要ではないフェルトペン、大きな画用紙などを用意することが必要です。

—0歳児保育室の教具—

・モビール

動くものを目で追うような時期には、目で追うことのできる速さで動くものでなければなりません。ですから、電気で動くものではなく、自然の風が吹くことで動くモビールなどを吊るしておきます。その動きによって、風を感じる事が出来ます。吊るすものは、ハイコントラストしかわからない乳児には、そのような色使いのものを用意します。

—ひっぱれ・ひっぱれ—

座って両手が使えるようになると、つまんだり、ひっぱったりが大好き。空いたティッシュボックスに布を折りたたんでしまったものなど手作りでいろいろと工夫をします。

—いろいろボックス—

歩けるようになった子どもたちに人気。ボックスにもものを入れたり、ボックス自体を手で押したり、遊び方は様々です。赤ちゃんは、いろいろなもの家具の隙間やおもちゃにある穴に何でも入れたがります。そのために、いろいろなものを入れるボックスを用意します。物を入れる口も子どもの発達によって違ってきます。最初は大きな口、次第にスリット型、小さな丸、形に合わせた口などいろいろと用意をします。

—マジックテープ—

布で、リンゴの木を作ったり、自動車を作って、マジックテープではったりはがしたりしてつなげたり、フェルトで作った細長い帯を繋げて遊んだりします。そのつなぎ目がマジックテープから、ホックにしたり、ボタンにして、それをはめてつなげていきます。こうした遊びが衣服の着脱へつながっていきます。また、つまむ、ひっかけるなど、指の技巧性を育てます。

—手作り絵本—

赤ちゃんにとって身近なものは、同じ部屋で過ごしている友達です。最初に出会う絵本として、友達の写真で構成された手作り絵本を赤ちゃんは喜びます。その中で、不思議と自分の顔の写真を見つけると、反応します。また、カタログや雑誌、チラシを切り抜いて、身近なものの認知絵本を作ります。身近なものの手作り絵本を子どもたちは大好きです。また、ストーリーのある絵本には、初めは「いないいな ばあ」とか「だるまさんが」のように2面完結したものを選びます。次第に4面ものになっていきます。あまりストーリーが長いと、話の筋がわからなくなります。また、最初は、色や絵の境がはっきりしたものがいいでしょう。

—0歳児室の家具・備品—

・おもちゃの整理棚

長時間遊びに取り組めない乳児のために、次に自分からおもちゃが選べるように、たくさんの種類のおもちゃが、子どもの手の届く場所に選びやすく置かれています。また、この時期は仲良く一緒に遊ぶとか、交代で遊びというよりも、目の前のものを取りあえずとってしまうという行動が多いため、あまり一つのところに集中しておくのではなく、部屋の中に点在させておく子ども同士のトラブルは減ります。次第にハイハイをするようになると、その姿勢での視線の先に、赤ちゃんの好きそうなおもちゃを用意します。次第につかまり立ちするようになるころは、つかまり立ちをすると自ら取れるような棚の上などにおいておくことで、発達が促されます。

・表裏どちらからも取り出せるロッカー

保護者が入れた着替えを保育者は反対側から取り出すことができるため、仕切りとしても使えます。

・デッキ

内と外をつなぐ緩衝地帯。日本の縁側の伝統は海外でも評価されています。プール遊びの場、外気浴の場、園庭から帰ってきたときの着替えなどに利用します。また、天気の良い日は、昼食を食べたり、おやつを食べたり、紫外線に注意しながら、外気に触れる体験も必要です。

—乳児の食食用椅子—

まず、食事をするうえで重要な点がいくつかあります。「足の裏がきちんと床につくこと」「座って食べるときに腕を机に置いたときに、肘が直角になるくらいの机の高さになること」「椅子の奥行きが、背板に背中をつけたときに、足の膝が座板のふちにちょうどになるくらいであること」「体がぐらつかないこと」というようなことです。そこで、座板の高さ、足の置く位置、座板の奥行きが調節できるものが望ましいと思っています。また、月齢の小さい乳児においては、保育者が食事をさせるため、大人も無理のない姿勢で食べさせることができるもの、また、下にこぼし、床がかなり汚れるために、そこに赤ちゃんが下りないようにハイチェアにしています。

月齢が高くなると、自分で椅子のところまで行き、自分で座るために低い椅子を使います。しかし、三つが調整でき

るものになっています。その中で、二種類あり、ひじ掛けのある物とない物とがあります。最近の世界的傾向として、職員はきちんと大人の椅子に座るようにということが言われていますが、日本では場所の問題などからなかなか難しいようです。しかし少なくとも、赤ちゃん用のほんの小さいものには座らないようにしたいものです。

—乳児用机—

ハイチェアの時にはもちろん、ハイテーブルで、保育者が3対1で食事の介助をするために、3人が半円に座り、保育者が対面に座るものを使います。半円形がよい理由は、赤ちゃん同士が相手の食事をするところを見ることができからです。ハイチェアで重要なのは、座板の出の長さ、足の置く板の高さの調節です。きちんと膝の後ろが板の端にあたるように調節しないと、立ち上がってしまったり、椅子から落ちてしまいかねません。

赤ちゃんが自分で食事が出来るようになると、ローテーブルになります。やはり保育者の介助がまだ少し必要なので、あまり大きくない4人掛けの机を使います。もう少し一人で食べることが出来るようになると、6人掛けになります。これらの机は、私の園では椅子に座って制作の時にも使いますので、その時には、ビニールテープクロスを敷いて使います。

—絵本ゾーンの家具—

乳幼児期における絵本の読みきかせの原則は、保育者が、ゆったりしたソファーに座り、一人から数人の子どもをだっこしたり、傍らに座らせ、本を読んであげることです。そのための環境を用意します。次第に、子どもが自分でページをめくるようになり、子ども同士がのぞき込んで一緒に見るようになります。そのための環境として、最初は床に本を置いておくなどの小さな環境を用意します。本は、自分で選べるように、表紙が見えるように並べ、自分で取り出せる高さに並べます。

—柔らかいもの—

子どもの遊ぶところに「柔らかいもの」を置きます。例えば、ソファーのような家具、敷物、クッション、マット、床の上のキルトなどのほか、その他遊びに使う柔らかいおもちゃが必要です。

—見立て—

この頃に大切なのは、いろいろなものをいろいろなものに見立てることです。見立てとは、現実として目の前にないものを想像する力であり、昔は、自然物を使って、葉を皿にし、枝を箸にし、木の実をおかずにしたものでした。それは、子どもにとって想像力や工夫、物の形の特性を知る上で大切なことです。イメージする力です。そこでこの時期には、具体的な形のおもちゃではなく、見立てに役立つものを用意します。積み木を電車や車に見立てて遊びというようなことが子どもの発達にとって大切です。見立て遊びをしていた子どもたちは身体のさまざまな能力の発達に伴って周りにある物や場所などに興味を持ち、探索活動をはじめます。探索活動の間に印象深く残った事柄をイメージとして心に描きながら、子どもたちの遊びは初期のごっこ遊びへと移行していくのです。

子どもが自分の中のイメージをもってそれに見立てるという遊びは、まさに子どもが主体的に遊ぶことになります。もちろん、何かに見立てると言うのは、そのものを見たことがあるか、経験したことがあるということが大切になります。そして、子ども一人ひとりが好きなもの、見たことのあるものに見立てると言うことは、例えば、四角いブロックを、電車に、車に、スマホに、おかずに、それぞれ見立てるために、モノの取り合いが減ります。この時期、

モノを取り合って、ひっかき、かみつぎが多くなります。しかし、ブロックを多く置いておくだけで、取り合いはせず、自分のイメージで好きなものに変えてしまうのです。

—ごっこ遊び—

見立て遊びからごっこ遊びへの移行は非常に重要な意味を持っています。見立てとはコップを使って水を飲むまねをしたり積み木を何かの食べ物として食べるまねをしたりすることですが、目の前にないものを想像する力、イメージする力があるからこそ生まれる遊びです。またこのころの1歳児は、バッグを持って買い物に行くまねをしたり、人形を背中におぶってあちらこちらと歩き回ったりします。これらの行為は、生活習慣の再現であったり、身近な大人の口ぐせのまねだったりします。この頃は、まだまだ子ども同士が積極的に関わって遊ぶことはあまりしません。隣で遊んでいる子を意識しますが、役割を分けて遊ぶことはしません。自分の中で、イメージして遊ぶことが多い時期です。それが、関わって遊ぶような仲間遊びへと変わっていくのです。

—探索活動—

1・2歳児期には新対処能力の発達とともに、さまざまな事物・場所などへの興味が広がり、未知への関心から探索活動が始まります。この探索活動がイメージする力をさらに豊かにするのです。探索活動がイメージする力をさらに豊かにするのです。探索する背景には予測や期待があり、探索活動は、子どもにとって遊びの一種類ではなく、その後の遊びにおける「下見」であると最近は言われています。探索活動が多い子どもほど、その後の遊びが豊かになり、危機回避能力に優れているという研究結果も報告されています。この頃の移動距離の長い子どもほど、けがをする確率が低くなるということです。

子どもたちの危険のないように、できるだけ探索をする機会と空間を与えることが大切です。もし、部屋から出ては危険なのであれば、部屋の中にパーテーションの一部を子ども自ら出入りできるような扉をつけたり、子ども本人は、こっそり探索していると思えるように、そっと見守っていることも必要です。

—微細運動—

1歳児クラスには、2歳になった子が順に増えていきます。このクラスで2歳になった子は、次第に微細運動を行うようになります。手やいびを使った補足精密な動作を必要とするものが微細運動と言います。この頃は、積み木をいくつか積んだり、紐通しをしたり、パズルをはめたりするものを用意します。

—認識と世界の広がり—

キンダーガーデンを創設したフレーベルは、「子どもたちが遊びの中で興味を持ったものを正しく理解し、より自由に表現するためには、すべての形や、色や数のことを正しく認識させなければならないと考えました。この観点から「数」の認識を導入しました。早期教育として「数」と並列して語っているのが「形」「色」ですが、これらは結果的に後の「さんすう」に結び付いていくものです。また、恩物と呼ばれている教具は何かを教えようとするのではなく「子どもたちの遊びは瞬間的にとことこの繰り返しの繰り返しであることに気が付いたことから生まれた、環境としての『もの』なのです。子どもも遊びと表現を手助けするおもちゃとは、次々に作りたいものが思い浮かんでくるものであり、そのためには基本的な形体をもつことが望ましいと考えたのです。

自然の中には非常に芸術的な形をしたものがあり、その造形美には感動することがあります。シャボン玉が球になり、空中を飛んでいく姿や宇宙から見た地球の姿。模様と形の美しさに見とれてしまいます。また紅葉の時期にはカ

エデの葉の植物だけではなく、昆虫の体の色や形のすばらしさに、子どもたちは目を奪われることが多いようです。パンダやキリンの加太の模様も、どうしてこんなデザインなのかと思うほどとても芸術的です。もちろん人体の身体の各部に至るまで、きちんと計算されているような寸法です。本当にすごいことだと感心します。形の違いを認識することは、文字の認識へとつながっていきます。乳幼児期から形の違いを認識する体験を十分にさせることが必要です。

—描画—

1歳から2歳にかけて、子どもたちは、かなりしっかりとした線が描けるようになってきます。しかし、まだまだ意図した線を、形を描くわけではありませんが、偶然に描いた形に後から意味づけをするようになります。丸い円も描けるようになりますが、それを描いた後に、「これはママ」「これパパ」とか、「これはブーブー」「これはわんわん」などと、それが、ただの円にしか見えないとしても、見立てる時期と相まって、いろいろなものに見立てていくのです。

—キッチンセット—

小さなキッチンセットは食育の第一歩。まず、食材を皿にのせたり、買い物バックに入れて持ち歩いたりします。そのモデルとして、皿に乗せた写真も装飾として貼って置いたりして、食べることへの興味を高めます。しかし、この頃は見立て遊びが中心ですので、あまり具体的な、本物のように見えるものではなく、ブロックやチェアリングをご飯やおかずに見立てたりすることが必要です。

—ゾーニングパネル・パーテーション—

子どもの生活空間の広さや質を子どもの発達に沿ったものにするために、フレキシブルにその形状が変えられるもので空間を仕切る必要があります。また、子ども自身の自律がまだできていない時期では、注意するのではなくハード的に区切ってその場に行けないようにする必要があります。例えば、危険なものが置いてある場所、落ちついて微細運動をしている子の活動を保障しようとする場合、壊したり触ったりしてほしくないものがある場所などは、区切る必要があります。

—おもちゃの箱—

色や形の違いを認識し始めるころなので、おもちゃを色や形、大きさによってしまえるようなおもちゃ箱を用意します。色によって、箱を分けることは片づけやすくもなります。また、数えるようになるための基礎として、集合の概念をつけることも必要になります。それは、車を入れる箱、汽車の入る箱、または、同じ形のブロックを入れる箱など、もの同士の仲間づくりをしながら片づけられるよう工夫します。また、今後の対応の概念をつけるために、その箱には、その中にはどのようなものを入れられるかということを示すために、そのものの写真などを貼っておきます。その写真と照らし合わせ、そのものを中にしまっていくようにします。

—くつろぎの場—

くつろぎの場所は、活動的な遊びでじゃまされないところで、そこには、1日のうちほとんどいつも使えるたくさんの柔らかいおもちゃが必要です。また、特別のくつろぎの場所以外に柔らかなもの触れる場所がいくつかあるといい

でしょう。例えば、柔らかい敷物や歩き始めの子ども用のビーズクッション、クッション付きの椅子やソファなどがいかがでしょう。そして、くつろぎの場所は本を読んだりその他静かに遊んだりするときに使われます。

—三つ子の魂、百まで—

この時期の体験は、基本的な生活習慣において自立し、大人になった時、社会的スキルを持ち、民主的な市民として生きていくうえで、とても大切なことがあります。そこえ、それを促し、育てるようなものを用意する必要があります。

—①随意筋の発達（基本的な生活習慣の自立）—

随意筋の発達は、絵を描く時にだけに表れるものではなく、いわゆる指先が器用になるということです。日常生活において様々なことが出来るようになります。自分でボタンを変えるようになったり、スプーンやフォークを上手に使えるようになったり、汗で汚れたシャツを着替えようとしたり、基本的な生活習慣において自立をしていきます。そこで、この時期には、十分と自分の意志で筋肉を動かすことが出来るような、また、自分でいろいろ出来るような遊具や環境を用意します。着脱の自立、食事の自立、排せつの自立、清潔の自立をしていきます。

- ・落書きゾーン：自分の意志で体を動きを調整する能力を育てるために、らくがきや手を自由に動かせるコーナーを用意します。
- ・排泄自立への配慮：トイレに行きたくなくなった時に間に合うよう、保育室の中にトイレがあります。
- ・着脱の自立への配慮：排泄の際、自分で着脱しやすいようにトイレの入り口前に椅子を置いておきます。服が着れているか自分で確かめる。
- ・清潔の自立：口の周りを自分から拭く。鼻、口を拭く。
- ・自立への配慮：自由というのは、自分で好きなようにしてよいことではありません。人から行動を制限される他律から、自分で自分をコントロールできるようになる自律に変わっていくことです。この年齢から、少しずつ、自立を促す工夫をしていきます。危険な場所、行ってはいけない場所を新年度当初は柵や仕切りで区切りますが、年度途中から行ってはいけないこと、やってはいけないことはしないという自律性を育てていきます。

—②脳の中のピア・ソーシャルスキルが敏感期を—

同年齢の子ども同士の関係が作られていきます。いわゆる「徒党を組む時期」と言われる時期です。それは、今後の社会を形成していく土台にもなっていきます。同時に、自分だけで何かをするよりも、「みんなで」することを好むようになっていきます。そこで、物を通して、子ども同士が繋がっていく工夫をしてきます。更に、他の子どもを意識し、子ども同士の間を力、協力する力を育てていきます。

- ・子ども同士のかかわりが生まれるゾーン

遊びの中でもままごとでは、お母さん役とお父さん役に分かれたり、料理を作る人と食べる人に分かれるように役割分担のある遊びを展開しやすい環境を用意します。また、電車遊びや積み木遊びが、他の子とつなげてよりダイナミックに遊べるような、隣同士の遊びが繋がって広がっていきけるような、物の用意や、保育者からの誘いかけが重要になってきます。

- ・円形の備品の多用

円形で座るとお互いの顔がよく見えます。クラスの仲間を機会があるごとに確認できるよう、円形のじゅうたんや円形の机などの備品を用意します。集まる時、みんなの顔をお互いに見ることが出来、集団の意識が生まれ、仲間といることの楽しさを感じることが出来ます。

- ・パズルシェルフ

どれで遊ぶかを自分で選びやすいように、パズル面が見えるように棚が斜めになった展示型のものを使用します。

- ・おもちゃ整理棚

子どもにわかりやすいよう、何が入っているかをイラストと文字で示します。1歳児の具体物そのものの写真表示から、すこし抽象化していきます。

- ・ベッドと赤ちゃん人形

友達同士のごっこ遊びのきっかけになります。国際理解のために、人形の肌の色や髪の色などが多様なものを用意します。

- ・ままごと遊具

幼児が最初にとらえられる数の概念は「3」なので、3ずつまとめます。またイメージを作りやすいように、狭い空間で小さな家のような空間になっています。

- ・床で遊ぶゾーン

線路をつないだり、積み木を繋げたり、隣同士の遊びを繋げられる広いスペースを用意します。また、随意筋の発達により微細運動画できるようになります。

—3歳以上児の保育室の家具・備品—

3, 4, 5, 6歳児は一緒に生活しています。それは、ひとつは個人個人の発達の連続性を重視するために、生年月日で発達を決めつけるのではなく、個々の課題によって活動を巣流すためです。たとえば、3歳児であってもはさみを使う能力は曲線切りができる子がいるかと思えば、5歳児でも、まだ、直線切りがやっとという子がいます。そんなときは、その子の課題は年齢によって決められるのではなく、個人の発達を理解し、把握をしたうえで課題が決められていきます。

子ども自ら、環境に働きかけるためには、その環境がその子の発達に合ったものでなければなりません。そして、一人ひとりの子どもが自分の発達に見合った遊びやもの、人に水から働きかけ、自発的に選べるために、大きな保育室に子どもの個人差の幅を受け止められる環境構成を用意していきます。すなわち、そこに置かれた遊具や教具、道具は、発達の幅が広いものを用意します。

- ・常設ゾーン

子どもは自分の好きな活動、もの、人を自発的に選ぶことが出来る環境を用意します。また、活動で使ったものは責任をもって片づけることが次に自由に使うことが出来るために必要なルールです。使って物が出っぱなしになっている場合は、子どもたち同士が今度使うときに不自由なので、お互いに注意をします。各ゾーンは天井の高

さ、床の素材の違い、障子の衝立、すだれなどで大まかに分けます。常設として、大体5つくらいのゾーンを用意しておきます。

- ・製作ゾーン

お絵描き、粘土など制作遊びのためのスペースには、テーブルと椅子を設置しておきます。そして、紙やクレヨンなどの文房具の他、様々な素材、道具を用意し、それらを子ども自ら取り出すことが出来るように、その収納方法や収納家具に留意することが重要です。終わった後、床に散らばった紙くずなどを子どもが掃除することが出来るような大きなほうきとちり取りも用意しておきます。

- ・木工ゾーン

隣接するベランダなどには、木工ゾーンを用意し、木工台に万力を取り付け、子ども自らのこぎり、金づち、ねじ回しなどが使えるように工具を用意しておきます。

- ・製作シェルフ

子どもたちが必要な材料を遊び取れるように、素材ごとにコンパクトに収納できます。

- ・画用紙シェルフ

子どもが選びやすいように色、大きさ別に収納してあります。

- ・作りかけの制作物を入れる棚

その日のうちに作り上げられなかった制作物をしまうための棚。最後まで取り組めることを保証します。

- ・展示スペース

完成品も大切に、展示するようにします。

- ・ごっこ遊びゾーン

ままごとだけではなく、いくつかのごっこ遊びが出来るような環境にしておきます。また、数人でイメージ共有して遊ぶごっこ遊びは、とても意味のあることだと分かっています。まず、家族ごっこで遊べるようなごっこ遊びの教材や家具を用意します。例えば、ままごとの小道具や人形などです。また、なりきり遊びをするために、様々なグッズの他、扮装用の衣装なども用意します。そこでは、様々な仕事体験をしていきます。ごっこ遊びは、どうしても女兒の遊びが中心になってしまうことが多いために、男児にとっても魅力あるグッズも用意します。例えば、消防士の衣装と消防器具、医者衣装と医療器具、宇宙飛行士、電車の運転手、パイロット、また、各国の民族衣装も着てみる事が出来るようにします。

ごっこ遊びのためのスペースは、数人で遊具を広げて一緒に遊べる広さを確保することが望ましいです。ままごと遊び用のテーブルやイス、キッチンなどの遊具を設置することも有効です。また、床に直接座って遊ぶことの配慮し、畳やカーペットなど素材感のある床材を設置することが望ましいです。ままごとだけではなく、いくつかのごっこ遊びが出来るような環境にしておきます。保育者は、外での活動的なごっこ遊びに使えるような小道具も用意します。そして、ごっこ遊びを豊かにするような写真やお話、散歩などに行きます。

- ・科学（STEM）ゾーン

自然の不思議さ、科学の不思議さが体験できるものを用意します。

・文字/数ゾーン

小学校教育につなげるために、身の回りにある文字や数に気づかせ、興味を持たせ、文字で遊んだり、数で遊んだりしながら、文字・数の体験をしていきます。

・絵本ゾーン

絵本のためのスペースとして、絵本を読んだり、眺めたりするためのスペースには、椅子やベンチ、ソファ、段差などを設置したり、畳やカーペットなどを設置して座ったり寝転んだりできる設えとすることも有効です。また、絵本を子どもが自ら選んだり手に取れたりするよう配慮した収納方法や収納の寸法とします。

・ゲーム・パズルゾーン

少子社会の中では、家庭では一人遊びが多くなりがちです。複数人で競ったり協力したりして遊べるボードゲームなどを用意します。並びきれないものは、カタログから選んでもらいます。

・ブロック・積木ゾーン

ブロックは高く積むことをします。それを壊して倒すとき、あまり大きな音がしないように下にじゅうたんを敷き詰めるといいでしょう。また、高く積みだけでなく、広い空間を作る体験も必要です。街づくりや、建物の平面図を作ることも大切です。そのような造形が出来るようなブロックを用意します。

・楽器や人形劇などの表現ゾーン

子どもが自ら楽しんで演じられるよう、楽器や人形やペープサートだけでなく、その舞台となるようなものを用意します。子どもが自ら選べるようないくつかの楽譜も用意しておきます。

・伝承遊びゾーン

伝承遊びは、正月にコマまわしや羽根つきのように、季節に関係するものが多くあります。その季節はならではの遊びを体験させます。このゾーンは季節限定できなものでもいいでしょう。

・多文化ゾーン

外国の絵本やおもちゃを展示して、多文化に触れる体験をします。また、外国の世界地図などを貼るのもいいでしょう。

・水遊びゾーン

プールの時期、プールに入る順番待ちや、終わった後の時間、水着で水遊びが出来る場所を用意します。水を様々な容器に移し替えたり、水流を作ったり、水の科学が体験できるといいでしょう。また、外で泥遊びなどの水遊びをすることも発達上大切と言われているので工夫しておきたいですね。

・子どもへの合図

言葉での指示ではなく、子どもが気が付くようなサインが必要。余韻の長いものが気が付きやすい。

— 経験による教育（ベルギー） —

保育者は、子どものウェルビーイングと熱中を支える 10 の重要項目が体系化されています。

1. 保育室の魅力的なコーナーやエリアに再配置する。

2. コーナーの内容をチェックし、魅力のない教材をより魅力的な教材と交換する。
3. 新しくかつ型にはまらない教材と活動を導入する。
4. 子どもたちを観察し、彼らのきょうみを見付け出し、彼らの興味の方角性に即した活動を見付け出す。

本稿は、2021年7月17日に行われた「第55回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)